

GAGARIN WAY

日英現代戯曲交流プロジェクト
ドラマ・リーディング

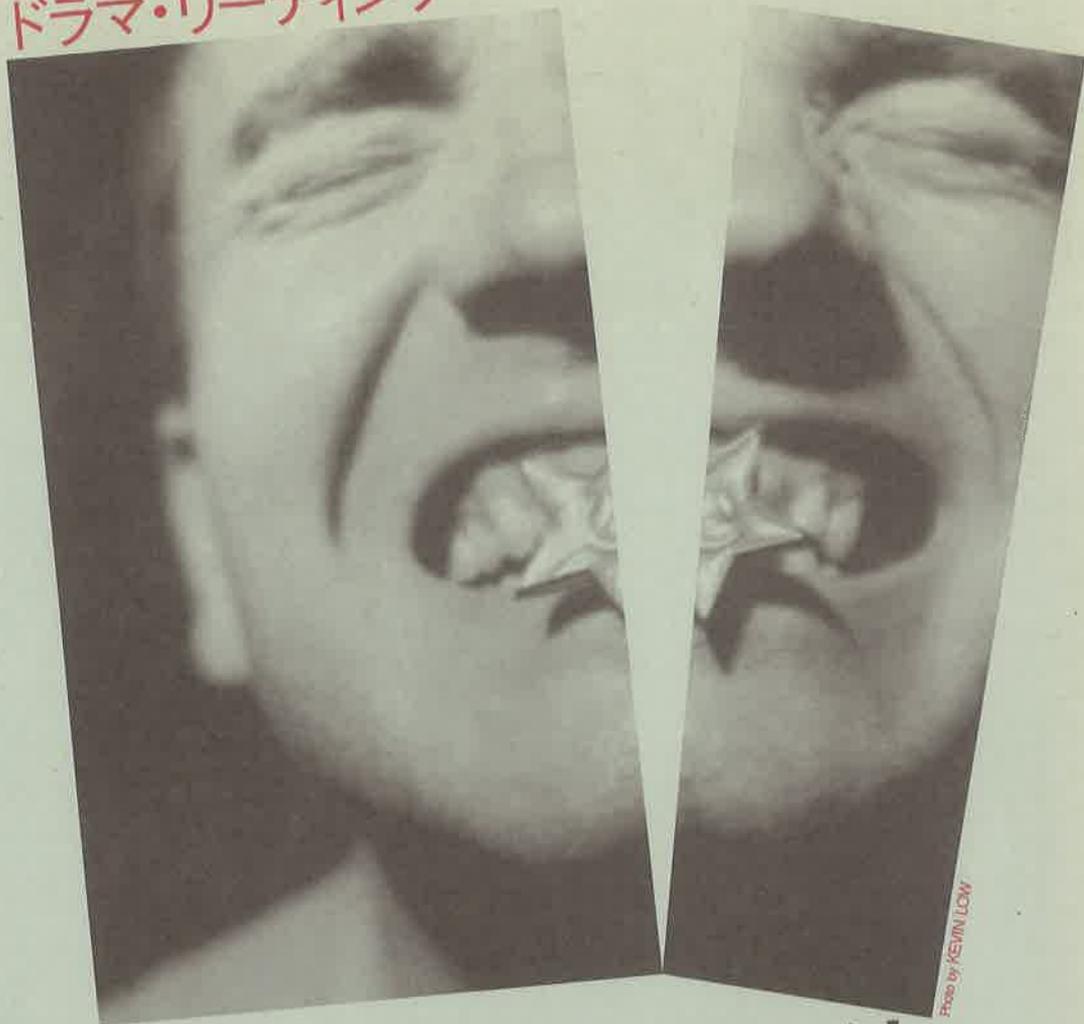


Photo by KEVIN LOW

日英現代戯曲交流プロジェクト

アイホールでは、英国スコットランドの首都エディンバラの中心的劇場である
 トラヴァース・シアターと提携し、「日英現代戯曲交流プロジェクト」を
 2003年度よりスタートさせました。アイホールとトラヴァース・シアターは、単な
 る海外交流の枠を越えて、両国劇作家の紹介から本格的な上演、さらに
 共同での新作創作への道を拓いていくことを将来の目標としています。
 第一弾として、昨年3月にデイヴィッド・ハロワーの出世作『雌鶏の中のナイフ』
 を、鈴江俊郎（劇団八時半）による演出でリーディング上演し好評を博しま
 した。また、6月にはトラヴァース・シアターにおいて、鈴江俊郎『うれしい朝を
 木の下で』（英題 'A Happy Morning Under a Tree'）と松田正隆『月の
 岬』（英題 'Cape Moon'）が、それぞれ現地の俳優、演出家によってリーディ
 ング上演され、あわせて両劇作家とロンドン留学中の土田英生をまじえて、日
 英劇作家のシンポジウムも開催されました。
 今回、昨年に引き続き、トラヴァース・シアター初演の戯曲『ガガーリン・ウェイ』
 （作/グレゴリー・バーク）のドラマ・リーディングを実施します。共訳・演出は、
 一年間の英国留学より帰国した土田英生（MONO）が担当します。またリー
 ディングに合わせて劇作家と演出家によるポストトークを実施し、観客や劇
 作家、演出家らとの交流を計ります。

作/グレゴリー・バーク
 共訳・演出/土田英生

2005年2月12日(土) 7:00pm / 13日(日) 2:00pm

AI・HALL



ガガーリン・ウェイ

GAGARIN WAY

AI・HALL自主企画

日英現代戯曲交流プロジェクト ドラマ・リーディング

ガガーリン・ウェイ

日時：2005年2月12日(土) 7:00pm開演
13日(日) 2:00pm開演
(開場は開演の30分前)

※13日の終演後、劇作家、演出家らによるポストパフォーマンス・トークを行います。

会場：アイホール (JR伊丹駅前)

料金：1,000円(全席自由席)

予約・問い合わせ：072-782-2000 (アイホール) aihall@juno.ocn.ne.jp

作：グレゴリー・バーク (Gregory Burke)
共訳：谷岡健彦 土田英生

演出：土田英生 (MONO)
出演：橋田雄一郎 (転球劇場)
奥村泰彦 (MONO)
小坂浩之 (桃園会)
小林正和

照明・舞台監督／西崎浩造 (エスエフシー)
音響／濱田留美 (エスエフシー)
宣伝美術／清水俊洋

制作／山口英樹 (アイホール)・中山弘美 (エアリアル・ヴォイス)
協力／垣脇純子 (キューカンバー)

主催：伊丹市・(財)伊丹市文化振興財団
提携：トラヴァース・シアター supported by the Scottish Arts Council
企画製作／AI・HALL <http://www6.ocn.ne.jp/aihall/>



大阪駅よりJR宝塚(福知山)線に乗車、約15分で伊丹駅に着きます。
駅西側徒歩1分でアイホールです。

『ガガーリン・ウェイ』—演劇のタータン・ノワール—

(この作品は) コンピューター会社の倉庫で、そこで末端の労働に従事しているエディとガリーが、高度資本主義社会に対する不満の「政治的」表明として、殺害目的で幹部社員を誘拐してくるという筋立てだ。最近、スコットランドを舞台にした犯罪小説をタータン・ノワールと呼ぶ向きがあるようだが、(…) この作品はさしずめその演劇版と見なすことができようか。と言っても、全編どこかユーモラスなスコットランドの労働者階級アクセントで演じられるため、(…) 全体としてはむしろ抱腹絶倒のコメディに仕上がっていると言ってよいだろう。ただ、この劇にグレゴリー・バークが書き込んでいるのは、経済のグローバル化の進行過程で生じるエリート・ホワイトカラーと下層ブルーカラーへの労働者階級の二極分解とその対立というきわめて今日的な構図であり、この劇はそのポップな見かけとは裏腹に、社会を正面から真っ当に捉えようとしたものなのである。
谷岡健彦 (『英語青年』(研究社) 2002年8月号より抜粋)

グレゴリー・バーク (Gregory Burke)

1968年スコットランドのダンファームリン生まれ。劇作家。大学を中退後、ダンファームリンの工場や厨房などで働いていたが98年に仕事をやめ戯曲執筆をはじめ。トラヴァース・シアターに送った『ガガーリン・ウェイ』が芸文担当の目に止まり、01年エディンバラ・フェスティバル・プリンジで初演され大ヒットとなった。引き続きナショナル・シアターでの上演を経て、翌年にはロンドンのウェストエンドで再演。ローレンス・オリヴィエ賞の最優秀新作演劇作品賞にノミネートされる。その後NYブロードウェイ、ルウェイ、スウェーデン公演を成功させ、ロンドン批評家協会最優秀有望劇作家賞をはじめ数々の演劇賞を受賞。そのパワフルな筆致は世界の演劇界からの注目を集めている。



土田英生 (つちだ・ひでお)

1967年愛知県生まれ。劇作家・演出家・俳優。MONO代表。89年劇団旗揚げの翌年より、MONOのすべての作・演出を担当。劇団以外での劇作、演出も多数。またCXドラマ『天才柳沢教授の生活』や映画『約三十の嘘』のシナリオなど舞台以外にも多方面で活躍。『その鉄塔に男たちはいるという』で第6回OMS戯曲賞大賞、文学座に書き下ろした『崩れた石垣のぼる蛙たち』で第56回芸術祭賞優秀賞など。昨年、文化庁の新進芸術家留学制度で一年間ロンドンに留学。



トラヴァース・シアター

トラヴァース・シアターは、年間を通してエディンバラ・フェスティバルの冒険と実験の精神を表現しようと、独立系アーティストたちによって1963年に設立されました。爾来数十年、スコットランドをはじめ世界中の劇作家へ新作を委嘱し、また環境の整備、専門的な支援や技術提供など劇作と舞台製作のあらゆる側面に及ぶ芸術創造活動を展開し続けてきました。開場以来の新作上演は600本を越え、スコットランドを代表する数多くの劇作家を送り出してきました。またエディンバラ・フェスティバルの中心的な会場として位置づけられ、そのプログラムは批評家や観客から高い評価を得るとともに、ロンドン・ウェストエンドでの上演や国内外のツアーなどに発展しています。2004/2005年シーズンには日本をはじめ、中国、フランス、ポルトガルなどとの国際プロジェクトも手がけています。